くらがの

発行所　倉賀野神社
〒370-1201
群馬県高崎市倉賀野町 1263 番地
電　話　027-346-2158
ＦＡＸ　027-346-2184
例祭（秋季大祭）　10 月 19 日
春季大祭　　4 月 19 日
公式ホームページ　www.chinju.info/

令和御大礼記念
高崎市指定重要文化財
御本殿保存修理工事

令和の御代替りを奉祝する記念事業として、このたび御本殿の保存修理工事が始まりました。おもに、老朽化した屋根の銅板の葺き替えをおこなうものです。

7月には神様に仮の場所にお遷りいただく仮殿遷座祭、続いて起工奉告祭を斎行しました。令和二年末頃に完工となる予定です。

今ある御本殿は、破損した旧本殿を幕末の頃に新たに建替えたもので、元治二年（一八六五）に上棟式がおこなわれました。

当時の設計仕様書である古文書、『木割仕様帳』と『御普請仕様書』が残っていて、部材の寸法や名称などがわかり、現存する建物と比較対照できる希少な例といわれます。御本殿はこれら文書類と併せ、市重要文化財に指定されています。

9 月 27 日、県文化財保護審議会委員の村田敬一氏を講師に招いて、見学会を開催。参加者は熱心に説明に聞き入っていた。

御本殿で寝ずの番をする梟（ふくろう）。

御本殿の造営と修理経過、背景等を簡略年表にまとめてみました（３面）。ご参照ください。

御本殿の彫刻。作業の足場を組んだことにより、これまで高く見上げていた彫刻群が間近に出現した。

7月3日、神社総代会と施工者の町田工業等、関係者が参列して起工奉告祭を斎行した。

ごあいさつ

宮司　髙木直明

氏子、崇敬者の皆様には日々健やかにお過ごしのことと拝察申し上げます。

先ず以て皆様の御奉賛のお蔭をもちましてこの度、令和御大礼奉祝事業として「御本殿保存修理工事」がはじまりました。ご理解とご支援に心より感謝と御礼を申し上げます。

さて昨今新型コロナウイルス感染拡大により我が国だけでなく、世界中の人々が苦難に直面しております。御病気の方や亡くなられた方々に心よりお見舞い申し上げ、お悔やみを申し上げます。

本神社の四月春季大祭は、大神様の前に祝詞奏上の神事は斎行したものの、太々神楽などの神賑わいはすべて遠慮いたしました。十月の秋季大祭にあたりましては、いつもより縮小しつつ、神楽や浦安舞を神前奉奏することとなります。先行きは不透明ながらも、「新しい生活様式」をともどもに実践してまいりましょう。

いま、神楽舞の「岩戸開き」の場面が思い出されます。高天原で天照大神が岩戸の奥に閉じこもってしまったために世の中は真っ暗闇になり、災いがはびこるようになりました。しかし天宇受賣命の滑稽の舞や天手力男神の力業をはじめ八百万の神々の所作のお蔭で、再び天照大神の御姿がおもてに現れ、世界は光を取り戻すのでした。足下は辛い日常かも知れませんが、大神様の御守護のもとに、やがて清らかで光明にあふれる日々の再び訪れることを信じて已みません。

人生儀礼

子供たちの健やかな成長を祈る初宮詣や七五三詣、結婚式、厄除など、人生の節目におこなう祭りを人生儀礼といいます。人生儀礼は神社の神さまとの出会いの場でもあります。

▼社務所で祈願祭のお問合せ・お申し込みを受け付けております。
社務所☎０２７（３４６）２１５８

◎初宮詣（はつみやもうで）

赤ちゃんは神さまからの授かりもの。誕生して七日目の「お七夜」に赤ちゃんの名付けをするのが一般的です。神社で「命名」の紙札を受けて神棚の近くに貼っておく習わしもあります。

赤ちゃんの健やかな成長を祈るため、初めて神社にお参りするのが初宮詣（お宮詣り）。誕生後、三十日から百日前後にお参りし、健やかな成長と幸せを祈ります。

◎七五三詣

子供の成長に感謝し、これからの無事を祈って神社にお参りするのが七五三詣です。

三歳は「髪置」とよぶ男女共のお祝い、五歳は男子の「袴着」、七歳は女子の「帯解」のお祝いとされています。

むかしは稲の刈り取りを終えた十一月十五日が七五三の日といわれましたが、近年では九、十月頃に早めておこなう例も多く見られるようになりました。

◎成人式

昔、公家や武家では「元服」といって、成人になったことを祝い初めて冠をつける儀式（初冠）がありました。今では、二十歳になった男女が大人として社会に認められ、祝福を受ける日として「成人の日」があります。無事に大人の仲間入りができたことを神さまに奉告しましょう。成人式の御祈祷を神社で受け付けています。

◎入学・卒業の奉告

「神々の御加護で実力を十分発揮できますように」と、毎年多くの受験生がお参りに見えます。

神前に身を正し、心を静めてから、物事に臨むのは大切なことです。入学や卒業の際にも、神社の神さまに感謝と御礼のごあいさつをいたしましょう。

◎厄除

人生は山あり谷あり。古くから人々は、とくに気をつけなければならない年回りを「厄年」と呼んできました。

とくに男性は数え四十二歳、女性は数え三十三歳が「大厄」とされます。厄年は、現代でも人生の大きな転機を迎える年回り。神社でお祓いを受け、ご加護をいただいて無事に過ごせるよう祈りましょう。

◎結婚式

神話の伊邪那岐命、伊邪那美命の男女二柱の神さまが夫婦の道の始まりといわれます。二神に倣って厳粛な人生の門出を神前に誓うのが結婚式です。

結びの御縁に感謝し、互いに尊敬し合いながら長い人生を歩み、家内安全と子孫繁栄を祈ります。

ご参拝の皆様へ

感染予防のため、ただいま「手水」は柄杓を使わずに、直接お手に水を受けていただいています。

境内点描

■氏子の篤農家から苗を頂戴し、六月に御田植祭を執行しました。神社総代会の恒例行事です。毎年倉賀野中の生徒たちがいっしょに奉仕してくれます。新型コロナの影響で今年は参加人数を縮小しての御田植でしたが、その後無事に成長して、十月十三日に抜穂祭を迎えます。

お初穂を秋の大祭におそなえする。

■境内のキンモクセイを前に、マスク越しに深呼吸。文字と画像ばかりで、香りを届けられないのが残念。

〈木犀や月の宴の西の対　鬼城〉

金木犀の発香は、ことし「中秋の名月」の10月１日頃に始まった。

随想「みやげ」

倉賀野神社総代会長
髙橋 義明

「すこし窮屈だった」

旅をしていた友人が帰ってきた。

彼と一緒に旅をしたことがある。北陸の老舗店でのことである。土産物で迷っていた。客は私たちだけだった。彼が店主に相談にのって下さいといった。二人の会話には耳目をひくようなやり取りがあったわけではない。うまく説明できないのだが、売り方と買い方をはなれたものになっていた。

商談が終わった。二人の顔には納得と満足と安心があった。私は旅のあり方を見た思いがしたことを覚えている。彼は土産選びには贈る人の笑顔まで想像するのだといっていた。

私は彼の土産と旅の話が好きなのである。窮屈の旅のことを喜ぶ私をみて彼も悦んだ。

土産はお宮で頂戴した箱という意味であって、宮笥という文字があてられていた。

伊勢神宮参拝の折にいけない人は餞別を託して参詣を頼み、お札やお守りなどを買ってもらったのが土産の始まりと云う。竹製の四角い箱で大事に扱われていた。それが神とは関係のないもの、賄賂をいれて悪用されるようになってしまった。

箱も文字も替えることになった。

「日本書紀」に素戔嗚尊が鬚髯を抜いてまくと杉が生えた。胸毛をまくと松が生えた。尻の毛は槙になって眉毛は樟になった。

用うべくを定めるとあって、杉と樟の両の樹は浮宝（船）にせよ、桧は瑞宮をつくる材にして、槙の木は死体を入れる棺に使えと書いて、食べる木の種を八十種もまいたともある。

江戸時代になって人々の暮らしが豊かになった。旅の制約がほどけて、神詣も盛んになった。氏神や屓の神を勧請して産土神と同じように奉った。地域の繁栄を願い、平和も祈る。祭りを祝う人達に共通の連帯感が広がって祭りが賑やかになっていく。

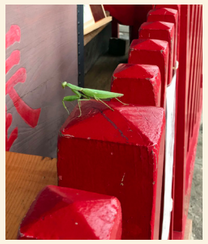
奉られた神は土地や風土に合った御神徳を授けて下さる。氏子、崇敬者は知恵をしぼり手間をかけ、生活のなかで育てそれをその地の特産に仕上げた。土産ものになった。

宮笥の文字も土産と替わっている。

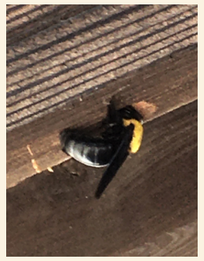
私は土産を文化と思っている。

旅の歴史を飾る日本人の心の底にある神への感謝の現れと感じるからである。

十月の初め、賽銭箱の前で何を祈っているのか、じっと動かずにいる。カマキリには古来、「おがみ虫」の名がある。聞けば西洋でも praying mantis（祈る予言者）と呼ぶのだという。



「祈る」



「穿つ」

夏、手水舎の屋根の裏、垂木に器用にとまる大きな蜂。つい身構えてしまうが、じつはクマバチという名の、いたって温厚な生物だ。しかし巣作りのためとはいえ、せっせと垂木に穴をあける大工仕事には困ってしまう。

「新型コロナウイルスの感染
拡大予防に御協力ください」

『日本書紀』撰上 一三〇〇年にあたり

「撰上」とは、すこし難しい語ですが、歴史書や歌集などを編集して天皇にたてまつることをいいます。

今年は、第四四代・元正天皇の養老四年（七二〇）に『日本書紀』が撰上されてから一三〇〇年という節目の年に当ります。天武天皇の皇子の舎人親王が撰上しました。国家の公的な歴史書（「正史」）として編まれたもので、神代の時代から、第四一代・持統天皇の御譲位までを収めています。

その中から巻第五の第一〇代・崇神天皇の時代を読んでみましょう。それは、こんにちの新型コロナウイルスの感染流行のこともあり、また本神社の御祭神の由来にも関わる部分であるからです。

▼疫病の流行

崇神天皇の五年、「国内に疫病多くして、民死亡れる者有りて、且大半ぎなむとす。」とあり、国民の半数もの人が亡くなってしまいました。天皇はいよいよ政務に励みますが、なかなか災厄を解決することができません。

そこで天皇は、倭大国魂神という神様に疫病の鎮静を祈願することになりました。『日本書紀』崇神天皇七年八月に「長尾市を以て、倭大国魂神を祭る主とす」とある記事がそれです。これにより十一月、「疫病始めて息みて、国内漸に謐りぬ」となりました。

「くにたまのかみ」とは、その土地、土地の地神に対する尊称ですが、いっぽうで、「大国魂神は大国主命の荒魂である」ともいわれます。本来同一の神様でありますが、御神威がいよいよさかんで荒ぶるような神様の御性格（＝荒魂）を指して、別の神名でお呼びすることがあるのです。

▼「豊城命を以て東を治めしむ」

崇神天皇には二人の皇子がいました。四十八年、天皇はいずれの皇子を世継にするべきかを夢判断で決めることにしました。

兄の豊城命は、御諸山に登って東に向いて鉾を八回突き出し、刀を八回振った夢を見た。弟の活目尊は、同じく御諸山に登って縄を四方に引き渡し粟を食べにくる雀を追い払う夢を見た。これを聞いて天皇は、「兄は一片に東に向けり。当に東国を治らむ。弟は是悉く四方に臨めり。朕が位に継げ」と宣いました。豊城命を上毛野君・下毛野君の始祖とするのは、『日本書紀』のこの記述によるものです。弟の活目命は第一一代・垂仁天皇となります。

▼御祭神の大国魂神

以上を『日本書紀』から引用しましたが、当地の伝承によれば豊城入彦命（豊城命）はそののち崇神天皇の命を受けて東国のこの地に至り、祭場を設けて松樹をお手植えし、東国平定の祭祀をおこないました。

この時、命は父天皇から授かり捧持してきた「御愛石」を御魂代として祈願をしました。それは亀形の自然石で、社伝によれば倭大国魂神の御分霊といいます。いまも御本殿に奉安されている御神体のクニタマサマです。

『日本書紀』撰上一三〇〇年の秋に、大国魂神様の御神威あらたかな御事跡が改めて思い起こされ、この度の災禍に、只管鎮静を祈念申し上げる次第です。

境内のツユクサ

《　御本殿の造営・修理経過と社会背景　年代順略記　》

- 嘉永６年丑（1853）寺社奉行宛に「飯玉宮建替修覆願書」を提出。
- 嘉永７年　（1854）正月『木割仕様帳』、４月『御普請仕様書』を作成。
- 安政３年　（1856）倉賀野宿大火。２百戸余焼失。
- 安政５年　（1858）江戸にコロリ大流行。倉賀野宿内を田子屋の獅子が巡り疫病退散祈願。
- 文久元年　（1861）11月中山道を皇女和宮降嫁の大行列。大工の日記に「宮様御下向につき休」
- 文久４年　（1864）２月　外遷宮。御神体を境内の神輿蔵へ仮遷座する。
- 元治２年丑（1865）３月　上棟式。
- 慶応２年　（1866）９月完成、遷宮式。屋根柿葺。
  ↓　34年経過
- 明治33年　（1900）御本殿屋根替。再び柿葺。
  ↓　37年経過
- 昭和12年　（1937）御本殿屋根替。銅板葺に。
  ↓　83年経過
- 令和２年　（2020）「令和の御大礼」を奉祝して、御本殿を屋根替。銅板葺。